

の低い程、知能の面に多く現れ、このような差を持つ子どもたちと同じに保育することが無理であることは今までもない。したがつて、とくに三年保育の場合、年令別に級編成するとか、その他保育の面に充分考慮せねばならないことが多くあると思う。

幼児の音感教育

——集団指導を中心として——

香川大学 佃範子夫

I 音感教育をとりあげたわけ

幼児期の教育においてなさねばならないもの、否、しておかねばならないものは何であるかを考えてみると、人はその一つに音楽教育をあげている。しかし、その音楽教育は従来個人指導の形で特殊的に行なわれてきたようである。がしかし私たちがここで音感教育をとりあげたのは、音楽の専門家を養成するというのではなく、むしろ大勢の者が音楽を正しく理解し音楽の楽しさを味えるような音楽の一般化をねらいとしてきた。

幼児の音感は満三歳半頃が最も敏感であるといわれているが、果してこのようないいえるだろうか。また幼稚園教育の中において集団指導による音感教育はできないものであろうか。この問題解決のために私たちは主として集団指導による音感教育の問題をとりあげてみた。

II 音感教育の実際について

今回は昭和三十一年六月より昭和三十二年三月までの結果についての報告である。

一年保育、二年保育、三年保育と各年令別級編成によるが、方法も年令差をつけず、各組共、全く同一の方法で行った。そして少くとも毎日約五分間音をきかせるというようにし、週に一度は香川大学の音楽の藤原氏の御指導を仰いだ。

音感教育といつても従来の音感のみを機械的に訓練するのではなく、和音、単音の聴音判別の他に歌唱、リズム、読譜、簡単な理論、など総合的な音楽教育という立場で実施していくよう心がけた。

これらの取扱いについては、子どもの興味ということを考え、児が喜びの内に、楽しく音楽を学びとつていただけるように「いろいろおんぶ」を使ってみた。その結果、クレヨンで絵をかきながらドレミで歌をうたい、花や洋服さらにはお弁当のパンが歌になつたり、また園外保育の時などふみ切の信号をみていろおんぶのうたを歌いだすというように、生活の中で音楽を身近かにとらえ楽しむという態度が見受けられるようになってきた。さらにピアノのkeyに色カードを立ててやると、自分でさぐりながら弾き歌いを楽しむといった状態で、歌う楽しみの他に自分で弾ける喜びを味えるようになり、今まで内気であつた子どもも自信を得て元気になつたという例も少なくない。しかし、何しろ始めての試みなので、どのように取扱うのが最も理想的なかいろいろな方法を試みた結果、和音をきかせる場合では、あらかじめ各和音の動作をきめておき、音をきくとすぐその動作をするというのが子どもたちには最も喜ばれた。単音の場合も、これは何ですかというのでなく、お話を中でメロディーと

(I) 和音の理解の程度

表 1. 時間的にみた場合 (1956年調査)

月	6月	7月	12月
和音名組名			
年長組	54%	63%	37%
年少組	54%	72%	53%

表 3. 新和音を与えて一週間後に
一つのみ聴かした場合 (1956~7年調査)

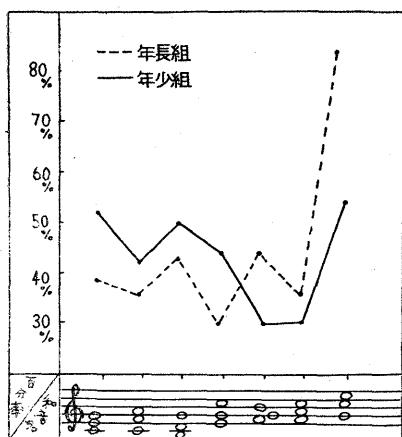
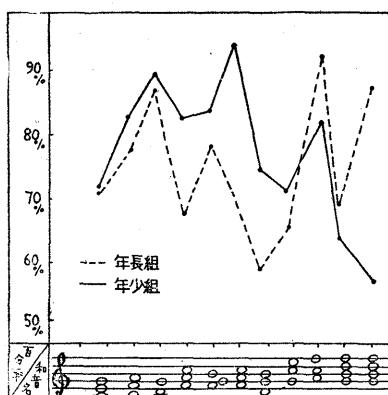


表 2. 種々な方法によるテスト結果
(1957年2月調査)

テスト種類	既習和音によるテスト	主要三和とその転回和音によるテスト	近接和音によるテスト
年長組	68%	77%	75%
年少組	71%	81%	76%

表 4. どんな和音をよく憶えているか
(1957年2月調査)



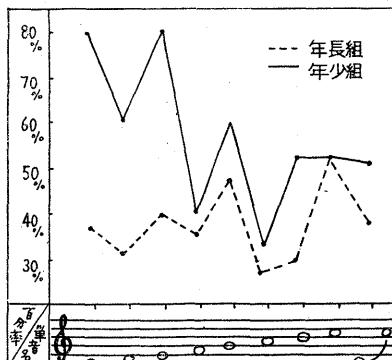
(II) 単音の理解の程度

表 5. メロディーとして与えた場合
(1957年3月調査)

	聞いたメロディーを歌いあてる		聞いたメロディーを弾いてあてる	
	一回目	二回目	一回目	二回目
年長組	68%	39%	42%	41%
年少組	73%	53%	73%	40%

〔註〕年長組とあるのは一年保育児(5.6歳児)年少組とは二年保育児(4.5歳児)

表 6. メロディーとして与えた場合
(1957年3月調査)



して与えるとすぐに歌って答えるというように、面白い遊びの中、あるいは童話の世界で自然に音感を身につけさせるという環境作りに指導者の創意工夫が何より大切であるということがわかった。

III 結果の考察

このような指導の結果、別表I、IIからみても明瞭なるごとく、和音、単音いずれの場合においても年少組の方が年長組に比べてよい結果となっていることがわかつた。これらの事柄について当時の卒園生にも全く同一の方法による音感教育を試みてみたが、当時の在園生と比較して、卒園生は在園生の年長組よりも悪いことが明瞭だつた。

したがつて音感教育は小学生より一年保育児、一年保育児より二年保育児の方がより効果的であるといふことがいえると思う。三年保育では発達段階からみて集団指導は無理なよう見受けられた。

IV 結びと今後の問題点

以上の研究により、音感教育は幼児期、なかんずく、二年保育の時が最も適期であり、かつ集団的に実施することの可能性も認められたと思う。したがつて私たちは幼児期においてなさねばならないもの一つに音感教育をあげ、しかもそれは二年保育の時の方が一年保育になつてからよりもより効果的であるといふことがいえる。

なお、今後の問題として幼稚園でつけられた音感を小学校入学とともに中断されることなく小学校でも引き続き実施してもらえばよいが、卒園生は高松市の各小学校に分散して行くので卒園後は友の会（同窓会）活動の一つとして放課後週に二回幼稚園へ集り音感指導を続けている。このようにして音感教育を施した子どもたちの行先を見守りつつ研究を続けて行きたいと思っている。

〔注〕 表3、表4で年少の方が悪くなっているのは、短かい期間に多

くの和音を与えるとどのようになるか試したところ、急にその数が増加したため、和音と和音名との結びつきに困難を感じ、その表現に迷つたものと思われる。

幼児期における美術教育

—認識過程としての美術教育批判—

幼年教育研究所

守屋光雄

戦後において、幼児画の教育がとくに取りあげられるようになつた理由の第一は、幼児画の指導が、單なる手先の技術の訓練などを重視する立場からではなく、民主主義教育の目標である主体性の確立した人間形成のために、創造性を重んずる立場から論ぜられるようになったからである。

この立場では、幼児の創造力を最大限に育てかつ伸すために、その障害となるような抑圧を退け、幼児の精神を抑圧から解放し、コンプレックスを解消することの重要性を主張し、従来の技術主義の美術教育を否定し、幼児自らの見方、技法で、主として記憶や想像によつて、すきな絵を自由にのびのびとかせる。教師は、幼児の描画意欲を活潑におこさせるために、刺激を与え、承認、賞讃、激励を与え、環境を整え、描画の結果よりもプロセスを重んずる。したがつて、幼児期におけるメリエや写生などは排斥する。さらには、教師自身の精神衛生も重視して、抑圧や劣等感に満ちた教師の